

基本理念・目標・方針を検討するための第 2 回協議会の委員意見内容

※ 各委員が発言した内容より、今後、基本理念、基本目標、基本方針を検討するに際して参考になりそうな箇所をゴシック、下線で強調したものを

<生涯学習分科会各委員意見>

○**梶田委員**：生涯学習の推進委員になったのは2年前ぐらい、現役から卒業したのが67歳で、地元はどう定着するか、まだ自分の家の仕事もあるが、区民のために自分がどうかできるかというところから参加した。

生涯学習という団体の中で活躍の場があるからというきっかけ、文京アカデミアのサポーターとして、ボランティアを手助けするところから参加した。その後、生涯学習室で講座を作る側の役割、また、委員として今度は講座を作っていこうということである。

目標、理念を掲げても現実には、ボランティアをやりたいときにどう皆さんが具体的に楽しんで参加できるか、サポーターの事務局を立ち上げて何とか楽しく共同にレベルを上げながらやっていくかが、生涯学習の中の一歩になる。

生涯学習で参加するのは高齢者が多いが、若い人たち、お母さんたちもやらないといけない。文京区は大学の連携がいろいろあり、そういうところで活用したいが、一步一步具体的に実現してみんなの実感として味わったときに生涯学習のレベルが上がるのではないか、今回も目標に対して具体的にどう展開するかというステージを提案できればということに参加している。

○**佐藤委員**：推進計画策定からいろいろな意味でお付き合いをしている。とにかく出入りが激しい。財団を作ったかと思ったら事業を取り上げて財団を廃止する、計画を立てたかと思ったらビジョンを作る。今回も生涯学習基本構想と学習推進計画、アカデミー構想という3つを一本化してアカデミー推進計画を作るが、実施部隊が指定管理で出されてしまう可能性がある。本当に実施してくれるか非常に不安である。

推進事業の部分は基本構想の部分の焼き直しとを感じる。例えば社会福祉協議会の事業が入っているが、生涯学習をやっている人で社会福祉協議会の動きを理解している人はおそらく5%もない。確かに福祉や教育は事業の根幹を成すかもしれないが、本当にこの範疇に入れるべきなのか。その辺の事業仕分けをしっかりとっていくのか、競争か共同かを委員会でお示しいただければ、もし競争なら勝てる事業を出すし、共同なら仕分けができる提案をしたい。

○**清水委員**：文京区の生涯学習活動は、行っている方々のレベルがすごい高く、チャンネルがすごく豊かだと思うが、その学習をなされた方々の活動をよくわかっていない。今回はそういう方が地域参画できるようなネットワーク作りをご提案できたらいい。

○**渡辺委員**：区内で講座の講師やサークル活動などをやっている。例えばほかの区との連携はどうするのか、国としての施策はどうなっているのか、もうちょっと大きな目で、上から見た情報を勉強し、この先どう生涯学習その他を導いていけばいい。

○**黒木委員**：区民の側から観光というと区内の観光施設に区内の人たちを引き寄せる、あるいは区外の人を引き寄せるようなことを考えているのではないか。経済課かどこかと一緒にやっていただければいいが、アカデミー推進計画ではアカデミックな活動としての視点から見る必要がある。そうするとターゲットを区民に置かなければならない。そうすると外に出るようなところを考えたらいい。区民が外に観光に行ってそこで勉強してくるアカデミックなレベルを上げることがしないと、今までの人を寄せ付けて観光案内をするようなことになったら寂しいものである。

<スポーツ分科会各委員意見>

- 白鳥委員**：体育指導員をやっていて今の基本構想の新しい基本構想に乗っているところは切実に感じている。基本的には基本構想に基づいたアカデミー推進計画を作る必要がある。あと同じようなところが同じような事業をやっていているというところをもう少し整理して一本化したものが出来上がればいい。
- 田辺委員**：体育協会は 31 団体あるが、子どもたちの参加が少ないので、分科会でそういう相談していこうと思う。グラウンドは少ない、体育館は少ないということもあり、そういう点も少しこれから勉強したい。
- 和田委員**：仕事人間、会社人間にとってリタイア後をどうするかが1つの大きな課題であり問題である。文京区の区民大学や3年制の高齢者大学があり、それを受けることによって利害関係のない友だちがたくさんできて仲間が増えた。文京区で 60 年間生活していながらよく知らない面があったが、講座を通して知ることができた。例えばお寺、神社・仏閣が 150 以上もある。名のついた坂は 100 以上ある。それも 1つ1つ歩きながら、町並み探検とか言いながら地図を作ったりしてやってきた。そういうことが1つの生きがいになり、友だちができることによって地域社会に入っていくことができた。そういう大学を通してみんなで学ぶ楽しさや、自分の時間がたくさんあるわけだからそれをどう有効活用できるかまで踏み込んでできたのが一番よかった。
- ただ、高齢者大学、講座、区民大学は3カ月とか長くても6カ月である。それ以上のものを継続してはやっていない。継続するためには自分たちでサークルを作ってサークル活動をやらないとなかなかできない。スポーツでも同じだと思う。礫川マラソンは 35 年間続いた。35 年間礫川の地区対でやっている。これが礫川の地区対だけでなく本当は文京区全体で参加しているのだから、地区対だけに任せるのではなく、文京区の全体をどうにかできないか。
- 大野委員**：文京アカデミー構想の意義に、まず生涯学習、文化、スポーツ、あと観光、国際を足して全町的な視点からということなので、高齢化社会を迎えて文京区が介護保険料の個人消費率日本最小を目指すことがスポーツを生かしてできればいい。
- 大石委員**：都立の心身障害児学校に長く勤めていたことで、特に知的障害と肢体不自由の教育をやってきた。その場合に卒業生を対象にしたスポーツクラブとか文化的なそういった何々教室というのは盛んにやってきたが、文京区には国立の大塚特別支援学校以外の知的障害の都立学校はない。たぶん他区の方でそれを受け入れている。文京区在住の障害児の特別支援学校を卒業した子どもたちがスポーツだとかいろいろな文化活動を盛んにやっていく場合に何か拠点が必要だろうが、周りには見当たらない。PTA活動とか学校開放とか、学校の施設開放で恩恵を受けているが、一番心配なのはそういう特別支援学校の卒業生をどうアカデミーの方で受け入れているのか、現状はちょっとつかめない。
- もう1つはスポーツ関係の各施設のグラフの状況で非常にわかりにくいのは、平成 18 年度だけがぐっと落ちているのはどういうわけか。それから昨年度から今年度にかけて新型インフルエンザの影響がどこまで出ているか。施設利用で学校行事等がかなり中止になっているので、その辺もお聞かせいただきたい。それからどの辺まで利用すると理想的なのか、ただ「現状はこうです」というだけでははっきりしないので、将来的に足りないというのはどこでどう足りないのか。どこまで増やせば十分満たされるのかという点も構想の中でぜひ言っていただきたい。

<文化芸術分科会各委員意見>

○**笠井委員**：去年、文京区民によるミュージカルに参加した。自分から応募する行事だったので、市民の方のやる気が高く、ミュージカルの学校の先生に直接指導を受け、とても有意義な時間を過ごせた。その参加者が例えば小学校以下だとか中学生だとか、または主婦だとか、いろいろな世代の方が集まっています、そういう方々と一緒に踊りを踊ったり歌を歌うことによって交流ができて、例えば仕事のリフレッシュや、主婦の話を聞いたり中学生の生の意見を聞いたりして、自分の中で勉強になった点が多かったので、こういう機会をもっと設けられたらいい。

課題として、そういうイベントはたくさんあるのに若い世代にはあまり伝わっていないという印象がある。その1つは例えば広報活動にしても私は区民だよりでそのイベントを発見したが、メーリングリストで流すとか、ホームページ上でもっと積極的に案内するとか、いろいろ看板もあるので、そこもうちよっと目立つような広報活動をするといい。文京区に引っ越してきて、例えばいろいろな坂に歴史のことが書いてあったりして、歴史に触れられるというのはすごくいい。

○**柳澤委員**：15年ぐらい前から文京区にいる、生まれたのは港区の麻布で向こうで育ったが、文京区は非常に恵まれている。霞が関から隣接しているし、文化施設、図書館、博物館そのほかにも数多くあって、大名庭園もある。港区は新橋、芝浦、麻布とばらばらだが、文京区は本郷と小石川でまとまっているから、非常にいろいろなことがやりやすい。シビックホールという大ホールもど真ん中にある。文化芸術分野からいくとかなり恵まれているが、あんまり有名でない。ほかの区から比べて、目立って文京区はいいという感じがしない。シビックホールでいろいろな行事をいっぱいやっているが、努力しているわりにはもう1つ目立っていない。

ビジョンは観光が先行している。芸術分野のビジョンはあまり聞いたことない。区民全体でこの文化分野をもっと推進していこうという母体、私はインタープリターということで今、一生懸命勉強してやっているが、そういう全体を盛り上げる推進母体はどうしてもいる。文京区は、アグレッシブではない。そこをどうしたらいいか、例えばこの図表の統計で、文京区の唯一の施設であるふるさと歴史館、入場者数が減っている。その辺も含めて、何かやはり1つダイナミックな動きが必要ではないか。

○**長尾委員**：前歴は筑波大学で医学関係の教員をしていた。医学誌も報じていたが、日本医大の前身の創立史の講座があったが、ああいうものはよかった。感心したのは明治の20年代に男女共学であって、そして入学資格は問わない。だから野口英世が出たり、女子医大を作った吉岡さんといった人たちが出たという話もあり、とてもいい講座があった。

それから感覚の講座があり、特に去年は触覚の話で非常に興味を持った。感覚の話というと、「人間の感覚器官はこれこれだって、脳まではこうやって行く」という話ではなく、「今はもっと感覚を大事にしなきゃいけない」という講座があった。それと並んで表面科学、サーフェス・サイエンス、表面科学会と提携といって、いろいろなものの表面、人体の表面の問題は一番問題だが、死体の表面の問題とか、そういうことをやる学会があり、それとこのアカデミーとの連携で講座があった。これも大変にユニークな話で有益であった。

もっと実際的なものとして、リコーダーを東邦音大でもって教えるという授業があった。リコーダーという楽器自体が素人向けだが、やってみると古楽器だから面白い。音楽などでは「響きの森」のシリーズ、区内の大学のジャズコンサート、変わったものとしては歌を歌う声楽の体験会が無料で受けられて、それを通じて声楽を習ったり、あるいはコーラスをやったりというようなところに入っていく道筋を体験もしたのでよかった。

ただ問題は、PRが少ない。PRというのは、「こういうものがありますよ」だけではない。区報などにそういうのは出ている。しかしどんなによかったかといったようなPRがない。イベントがあることだけ知っても行くそのモチベーションがわからない。もっとそういうモチベーションをわかせるような何か手立てを今後は考えるべきだし、そういうことがまた生涯学習につながっていく。

それから公園、パークの問題。ただ公園を作るという意味ではなく、1つ1つの公園にそれぞれの特徴を持たせる。例えば看板を置いておくとか、あるいは全体の野原にしてしまうといったような区もある。観光の問題では、どこかほかの国との姉妹都市といった問題はあるが、そういったものも活用していくということで、そんな意見を述べられたらいい。

○**榑崎委員**：書道を通して文京区へのいろいろな事業をしている。書道連盟展、区展があり、そのときに書道連盟を通していろいろとお手伝いをしている。文京区には大勢の書家がいるが、もっともっとPRをして大勢の方に参加していただきたいとかねがね思っている。書に親しんでいる方がいることはよくわかっているが、なかなか参加していただけない。それをどのようにかしてもっともっと広く参加していただきたい。

例えば日展、読売展、毎日展、産経展といった大きな展覧会はたくさんあるが、そういうところに参加している人たちよりも、むしろ区民としての楽しみをしていただいている方たちにスポットを当てていきたい。

子どもたちにもう少し書道に親んでもらう場面を作ること、区を通していろいろなよその区でもやっているし、書道連盟とか大きなところでもかなりそういう事業をして広いところで活躍しており、文京区には大勢の子どもたちはいるので、ぜひそういうことで何かお力をいただきたい。

＜観光分科会各委員意見＞

○**新保委員**：アカデミー推進計画で観光を議論する場合には非常に狭い、経済効果は抜いた生涯学習、またあくまでも区民に限定したかたちでの議論しかできない。観光に欠かせないのはやはり経済的な側面が非常に重要だし、確かに今、住民の方を区民だけではなくて昼間区民も区民であるという発想で基本構想もやっているのだから、このアカデミー推進計画も住民の方、昼間中間区民の方を含めて計画をやるということであれば経済を除いた観光については議論できる。ただ、その経済を入れたときにはかなり無理があるのかなという気がしている。

3～4年前に観光を所管していたのは区民部経済課で、今度はアカデミー推進部に移ってきたが、この所管自体にちょっと無理がある。文化の側面、生涯学習の側面だけで観光をやれといえどももちろんその議論はできるだろうが、観光の視点で欠かせないのはやはりその経済活性化、消費活性化なので、これを抜きに観光を議論するというのが果たして適切なかどうかという疑問がある。

○**上田委員**：商店会という観点から見て観光という切り口で考えた場合かなり難しい部分がある。しかし、観光の中には地域の活性化というものはどうしても必要である。人が集まってくるような場所、それから人がそこで滞留できるような環境、それから来てもいいなというようなその対象、そういうものをわれわれ商店会の方でいろいろと考えていた。

例えば私は地元の町会の町会長もやっており、跡見学園の前に明治のころにあった柳町のすぐ向かい側に住んでいる。そういうところの中で今、文京区は五大花まつりのようなかたちで人を集めようと考えている。五大花まつりといっても、かなり古い建物などを対象にして動かしている。例えば今、湯島の菊まつりなら天神様、つつじまつりなら根津神社とか、根津神社だと結構いろいろな話があり、落語の世界でも結構出てくる。それから白山神社のようなところを使いながら何か観光の中のアカデミーという部分、こういうものを何か考えていきたい。

まず文京区とコラボしている今、アカデミーという観点からいくと、例えば樋口一葉、佐藤八郎、森鴎外はほかの地域とあまりバッティングしていないが、樋口一葉なんか特に最近、山梨県の塩山の方が結構にぎやかである。文京区の方は結構取られている。特に台東区とか竜泉の方が人気はある。今、本郷のお寺で一葉の命日のときに何かやっている場所がある。あそこでも塩山の方から観光協会の人に来て一生懸命盛り上げている。文京区の場合はちょっと後ろの方に回っているのだから、この辺を何とか前を出して商店会という中でアカデミーという部分をどう見ていくか、進めていくかというこ

とを今度は分科会の方でちょっと考えてみたい。

○**山本委員**：私はこの「区内まるごとキャンパス」の言葉が大変好きであり、ぜひこの構想は時間がかかると思うが実現させていけたら、未来の子どもたちのためにもそんなふうに思っている。今、現在、英語観光ボランティアの講座を受けており、生涯学習司やサポーターの会とかインタープリターの会の皆さまはネットワークを今、徐々に広めつつ、皆さん、固めつつある。この英語観光ボランティアの方でもネットワークをぜひ、3期まであるがまだでき上がっていない状態なので、この辺からしっかりと土台を作り上げてからかなと思っている。

10年、20年先のことも考えると、少子化はあるが、子どもたちにもぜひ「こういったものがあるんだぞ」ということは、すぐに参加させなくても、いつも身近にあることは少しずつでも気付かせていけたらなどは思っている。

○**市川委員**：観光地に行く方の立場ではいろいろ楽しんできたが、実際にそういった誘致を計画するというにはあまり慣れていない。ただ、観光地に行くという楽しみを持って行く側なので、楽しみを持って行けるようなことを考えていけばいいのかなと考えている。

それが観光について、文京区の特長ということで、その評価がないので、当然各施設の利用とか利用時期の問題とかいろいろあるかと思う。ある施設を作ったからにはその施設を運営する管理レベルがあるはずなので、その管理レベルをよければ教えていただきたい。その管理レベルが壊れるとどうなるのか影響等も考えられていると思うので、そういったのがあれば非常に読みやすかったと思う。

資料の26ページから今までの基本構想にのっとりた施策でやられていたというのがあったが、観光については観光ビジョンができており、それにのっとりた実施計画書はあったのかなのか教えていただきたい。もしあるならば、その評価も当然そろそろやられているのではないか。過去の実績とか何をやろうとしたかというそれを知りたい。

あとは全般的なことだが、区役所の対応は、文京区は大きすぎてあまりよくない。特に入り口を入れてすぐ。ほかの区、例えば豊島区とか荒川区、江戸川区、こんなきれいな建物ではないが、とても親切に対応していただいているという印象を持つ。

○**奥田委員**：新聞、テレビに出てくる観光というと1,000万だとか1,500万だとか、もっと前倒しで2,500万という数字ばかりが出てくる。観光に対する地域の対応力がやっぱり観光事業のすべての根源だろうと思う。

○**白井委員**：昨年、東京都が観光に力を入れるということを受けて、文京区の観光協会もシビックセンターの17階から1階に事務所を構えた。文京区にはたくさんの史跡、財産をたくさん持っているにもかかわらず、区民の方がまったく知らないという方がほとんど、これをどのように告知、皆さんに広く知っていただくかをまずやらなければいけない。あと最近、文京区の中も歩いている方たちがすごく多い。いろいろな史跡をルートにして歩く中で他区の方たち、あるいは当区の方たちが「文京区の中でどこをどう歩いたらいいんだろうか」という文京区の観光案内のお問い合わせが多くなった。

文京区の史跡とかをとにかく知っていただくためには何をしたらいいのかということ今、いろいろ模索して、いろいろな資料を作って皆さまに配布している。その観光ビジョンもあるので、これからその観光ビジョンをまたもとにして現実に、これは今回、商工会議所の方や商店連合会の方たちとご一緒にこの文京区の観光を活性化するために皆さんで力を合わせてどうしたらいいのかということをやりたい。

<国際分科会各委員意見>

○**本松委員**：年少人口は老年人口と同じぐらいで、これから生涯学習ということで、基本的には子ども

たちがどうやって文京区を見、文京区の中で育っていければという視点で、保護者もそういう視点でつながり等について国際の中でお話をできればと思っている。学校では国際理解教室等々で文京区の8割を占めるアジアの方とかとは接点はしているが、それはその時間だけで終わっているのも、それが家に帰ったり地域の中で広がっていけるような、そういう視点でこの国際交流という学校とのかかわり、子どもたちが見て感じているような話については、保護者からいろいろ聞いてかるので、そういうところを膨らませながら、つなげていければと思う。

アンケートで20歳以上ということ子どもたちの意見は反映されないんだなと思って、これは保護者から聞けということだと思うが、ちょっと残念である。

○伊藤委員：女性団体連絡会は20年からの歴史があり、男女共同参画社会を作ろうということで、それが主目的でいろいろなセミナーや講座を続けてきた。「世界の女性たちは今」というテーマでずっと今まで大学の先生や、また現地の方たちと、私どもの委員のネットワークでそれぞれの方をお招きしてセミナーを行ってきた。もう1つは世界の楽器シリーズもずっと続けており、いろいろな国のメンバーが現地の方が演奏してくださった。センターまつりを毎年9月に行っているが、ここに必ずそういう世界の楽器を演奏していただくことをやってきた。セミナーの場合は、大使館に直接電話をして「世界の女性たちは今」というテーマでお招きしてきた。世界の楽器シリーズの方では、去年は海外青年協力隊で行っていた青年たちが向こうで学んできたガムランの演奏をしてくれたが、そういうたかたちで招いて区民に啓発をする、お知らせするという活動はしてきている。

ただ、この文京のアカデミーの構想からいくと常に単発な事業である。ただ知識を受け入れるというかたちである。区民の方にいろいろな情報を与えるというだけの活動をしてきたなと思った。これからはそれが文京区の中に国際交流としてある国と本当の文化の交流ができるかどうか。それはやっぱり課題だと思った。幾つかの国との逆に交流が定着をしていく。そしてもっともっと文京区が海外に強い区になれるような活動が今度この新しいアカデミーの中でできたらいいなと思った。

○國分委員：文京区に長く住んでいるが、海外の仕事をしており、海外で暮らす期間は長かったが、海外のお知り合いの方が日本をどのように見ているのかということを感じたり経験したりということが非常に多かった。自分のそういう海外のキャリアを一通り区切りつけて日本に戻って、やはり国際ビジネスとか国際交流の仕事はもうそろそろ打ち切ろう。国際交流が非常に難しいということを経験の中で実感して、日本に戻ってきて文京区のインタープリター講座をすぐ受講した。この理由は日本の歴史と文化というものを伝達していく、そういう人材を育てるということで、やはり自分が海外に長く暮らしていたということから来る、欠けている点、日本の歴史と文化をまず勉強しなければ国際交流の「こ」の字も語れないなどというのが海外にいたときの実感なので、インタープリターの講座を受講している。

インタープリターはいわば日本の歴史文化をお伝えすると、文京区の歴史と文化をお伝えするというかたちの人材を育成することなので、自分の今までのそういう歩みを踏まえて今、勉強しているその講座の内容を活用することで進んでいきたい。

そういうことで文京区の周りの新宿区とか豊島区のホームページを一通り拝見して、国際交流に絞って他区がどのようにやっているのか見ると、残念ながら形式的な基本ビジョンに終始している区がほとんどであり、果たしてこれで国際交流が実際に地方自治体でできるのかと率直に感じた。

端的に言うと形式的な計画とかビジョンは具体的にはやはり行政で進めるということ。国際交流は姉妹都市協定を交じ合わせたり、ホームステイのそういう協定を交じ合わせたりということが各区のところに書かれている。やはりホームステイの提携を交じ合わせても、海外へ行って文京区なら文京区のお子さんが文京区の歴史と文化を相手先のお子さんに伝えられるのかどうかが非常に重要なポイントではある。それがどうしても学芸員とか、そういう行政の立場で進めていくにとどまっている印象を受けた。そういう意味では文京区の方ではインタープリターを含めて区民参加の生涯学習を今まで進めているので、そういうところがこの国際交流の分科会でこれからご提案をする1つの切り口と思っている。

○熊田委員：生涯学習を推進する市に勤務していた経験からすると、生涯学習と町づくり、生涯学習推進が町づくりに結び付くという考えはすごく自分が好きである。今、教育の予算も削られてきているし、生涯学習に行政がかかわるのはだんだん減ってきているように思うが、そういう中で文京区は特色を出していこうというところは、そういう区に住んでいることをうれしく思う。生涯学習に参加する人はやはり限られてしまうのが1つ問題点としてある。実際に参加した方が地域に戻って、また地域で広めていくような仕組み作りが必要ではないか。

○森岡委員：私はキーウィクラブとして今まで文京区のイベント、国際交流フェスタその他のイベントに何回か参加しており、これからの文京区の国際化、国際交流については区の姉妹都市の今後の関係、それから今、区にはだいたい7,000人ぐらいの外国の方がいるが、その方たちとの関係、ということは国際交流、内に向かった交流、それから外に向かった交流というものが大きく考えられる。そういう問題を考えながら、区としてその国際化をどうお考えになっているかということをもう少しお聞かせいただいた中で分科会の中で具体的な問題についてはお話をさせていただきたい。国際交流という点を考えると、例えばスポーツの交流もあるし、文化の交流もあるし、いろいろな分科会とのかかわりが非常に出てくると思う。

○佃委員：文京区がまるごとキャンパスという、この発想は非常にうれしい発想で、たぶん世界の中でもフランスと幾つかしかない発想なのでこれはいい。歴史的に見るとどうなのかなというところで神田神保町がその主役を以前担っていて出版物、いろいろなことで若者が産業を作りだしていった。それが大きく広がって文京区という広い地域にまたがっていったところがこの明治以来あるので、そういった意味で文京区がこの教育という立場から学校というものが、どれくらい日本の中で一番多いとか、面積あたり多いとか1人当たり多いとか、ほかの区から流入が多いとか、つまり世界一の教育地域なのかどうかとか、こういったものをとにかく自分の第一シンボルとして強烈にアピールできることが1つ重要である。その具体的なのはもちろん東大といったものはあるが、国際化という点を含めてこれから、特に文京区にある大学の方には協力がなければもちろんできないことなので、そういったところは非常に興味がある。

いわゆる外国人社会というのは文京区の場合には産業が育っていないので、外国人ということとはちよっと無理なのだと思っている。そういう意味で国際化といったときに外国からの留学生、今、政府が30万人計画ということでイギリスやフランスには及ばないが、とにかく30万人やっちゃおうということでやっている。そのシンボリック位置が地域としては文京区も持っている。そういう意味でそういったところで外国から見てもすごい国際教育村だと言えるような町、その中に本屋もあれば何ともあればといういわゆるコンセプト作りの町が育つのかどうか。秋葉原だったら世界一のところで、あるいは巣鴨だったら高齢者が遊びに行って一番生き生きする地蔵通りを持っているとか。それは世界にないので、そういった意味での特徴が果たしてアピールできるかは観光にもやがてつながるところで、そういういわゆるキャンパスが本当に観光化できるためには持っている資源を、施設および全部を活用しなければとてもできるものではない。観光というのはそこに自信があって特徴があるものをアピールすることができることなので、そういった意味での何か視点の絡みがあったらいい。

そのためにはやはり町をつくるという受け入れをする、これから高齢化する社会、少子化と高齢化が同時に入ってきているという基本の背景がこのコンセプトに入っているが、そこにいわゆる第三者のカンフル的な国際化というものがどういう影響を人生生活設計の中で起こってくるのかというところに、その子どもたちが市外からもたくさん入ってきているということであれば、そこで国際理解教育というものが多く取り組まれれば新しい社会の子どもたちが成長して出てくる。それから高齢者の場合には活性化ということでやはり刺激というものは違うものを少し少し触れることで心の活性化が生まれて、これだけ年を取ったけど新しいものもまたあるということ。それからまったく知らない人にも教える。そういうこと*で*いわゆるソフトウェアの生き生きしたものは作る。それをどうやってハード面で作り上げていくかという視点でやれたらと思う。

私どもが実際にやっているのは小学校の理解教育であったり日本語のボランティアの方々に施設

を提供したり地域の人と、おじいちゃん、おばあちゃんの町内会の人たちと一緒に食事を作って食べたりとか。それから大きな秋まつりといってその地域の方にたくさん遊びに来ていただいて踊りを見せたりとか、そういうものを行っている、いわゆる町内会レベルでしか動いてはいないが、何らかのかたちで文京区がそういう世界一というようなものを目指していただけるとありがたい。

<各分科会座長意見>

○野口委員（観光分科会座長）：どのように観光というのを位置付けるのか、この組織、この会議の中で、もしくは分科会の中でどう扱うかということについてはやっぱりきちんと考えなきゃいけない、限定しなきゃいけないという意識は持っている。観光ビジョン概要版を拝見すると、観光振興に取り組む意義として社会的効果と経済的効果があるので、もしかしらここではやはり皆さんご指摘のとおり経済的効果というのはちょっと置いておいて、社会的な効果、社会的な効果の中には歴史・文化的な部分といった点になるのかなと思う。

ただ、先ほど外から来た人をガイドで案内するということを含めるのか含めないのかというご議論もあったが、観光というのは自ら観光する、つまり国の光を見に行くというのもあるが、観光の観という字は「観（しめ）す」とも読む。自分たちの優れた文物を外から来た人にお示しする、見せるということもある。自分たちの生活文化の客観視といったこともある。

例えばもしここがこの会議の中で重要なテーマが「学び」だとすれば、それはやっぱり、よそ者を通じた学びというか。外から人が来ることによって、よそ者という言い方はすごく排他的な言い方だが、よそ者という刺激を受けることによって自らが自分たちの町ってどういう町なんだろうとか、ほかの町と比べてどこが優れているんだろうということを見直すきっかけになるという学びの機会なのかなと感じており、そういった意味合いでその観光をとらえるとすればまさに生涯学習であり、結果的にはそれが区民の皆さんにとって、アカデミックな部分といったことも同時に達成できるのかなと思う。その辺のバランスを取って進めてまいりたい。

○青木委員（スポーツ分科会座長）：私の所属しているスポーツ健康科学部は千葉県の印旛村にあり、文京区にどれほどの体育施設があるのかもわからないし、ある意味ではよそ者なのかもしれない。皆さん委員の方々の意見を聞いて「なるほどな」と思う部分もたくさんあったし、これからいろいろな意見を出していただける期待もしている。

スポーツ振興基本計画が文部科学省の方で出されている。それに基づいた流れの中でいくと、キーワードになってくるのがいわゆる総合型の地域スポーツクラブというところは非常にどこの市町村も活発にやられている。それとともにそこで扱っていく使用者を育成していく。つまりハード面としてスポーツ施設をどうとらえていくのか。それからもう1つはソフト面として指導者を育成するのをどうとらえていくのかということが大きく述べられている。

それに加えて競技力向上も出されている。具体的にはJOCの関係のこともあるが、競技力をどうとらえるかというような側面もある。

文京区ではこちら辺をどう扱っていくのかまだ見えない。場、つまり今あるスポーツ施設をいかに充実していくのかという方向でいくのか、もしくは指導者の育成、ソフト面を充実していくのかということは、行政の方の方々とも相談をしていきながら方向性というものは聞かなきゃいけないかと思う。

あと1つは子どもから高齢者ということは非常に今、重要な課題になっているので、特に委員の皆さま方にはハード面のことをどうしているのか、ソフト面をどうしているのか。それからあとは多分野との連携もしなきゃいけないということと、非常に事業もスポーツというカテゴリーの中はずいぶんいろいろな入っているのだから、こちら辺は他のところと共生していかなければならないものなのかなというところで、競争化は共同のようなかたちで連携していくとかたちでやっていかなきゃいけないのかなと思う。いずれにしてもスポーツというと子どもから高齢者というと生涯学習というのは1

つのキーワードになってくるので、ここら辺との兼ね合いも含めてスポーツの側面から議論をしていければと思う。

水越副会長（文化芸術分科会座長）：文化芸術について、まずはその委員の皆さんとじっくり話をしてみたい。今日も非常にいいお話をいただいたのもっといろいろなことがあると思う。これが公式的にどういう会がどういうスパンであるかちょっとわからないが、いわゆるブレインストーミングというかたちでご意見をいただいたりというようなことをやりながら、どっちかというところからボトムアップでやっていきたい。僕は行政的なものにあまり慣れていないので抽象的なところから話をしていくと何だかよくわからないということがあるので、やっぱり具体的なことからマップを描いていきたい。

文京区には比較的、史跡があったり大学があったりいろいろあって、そんなに有名じゃないかもしれないがいろいろあるということ、いろいろやりようはあるはずである。今までやられてきていることもかなり面白いことがあると思うので、何か、相撲で言うと今から 15 戦全勝するというよりも 8 勝 7 敗のものを 10 勝 5 敗とか 9 勝 6 敗にするみたいな感じで、ちょっとよくしていくというぐらゐの考えでやっていくのが一番いいんじゃないかと思う。

全体で言うと、やっぱり言葉がぼんやりしているというか一般的すぎてよくわからない。例えば生きる目的を学び、学ぶ術（すべ）を学ぶと言われてもそうかなと思うが、これを読んで一番ばんと来るのは区域全体が生涯学習のキャンパスだという、そのキャッチフレーズは非常にわかりやすい、それで意味もあるということだと思う。

かつて長野県は「ピンピンコロリ」というのをやり、ぴんぴんしているおじいちゃんたちやおばあちゃんたちが翌日ころっとおうちで逝くと、これが一番いいやり方なんだと健康増進の言い方をしたことがあったが、これはもうみんなが使える言葉で、しかも非常に含蓄が深い。言葉を魅力的に研ぎ澄ましていかないとやっぱり埋もれちゃうんじゃないかと思った。

アカデミーというのは、広い意味合いで使っている。あんまり今の大学とか、キャンパスとかアカデミーってすごく大学で考えると、大学って別に天国じゃないわけで、何か非常に権威主義的になったり縦割りになっちゃったりする。だから学びの場所が広がるという意味ぐらゐだととらえておくというのは基本的に大事なかなと思った。

文化芸術のところ、特にそのPRのことがいろいろお話しは出て、お子さんたちにもっと書いてもらうとか、あんないいミュージカルがあるんだからというようなことがあったが、やっぱりそれはどういうメディアを活用するかということにつながってくる。区報なんか非常に重要だし、例えばケーブルテレビなんか大事だが、こういう建物の中に何かいろいろやってみるとか空間をメディアとして利用するみたいなこともあるかと思う、そこら辺についてはちょっと横断的に分科会を超えて考えていけるところかなと思った。

○山崎会長（生涯学習分科会座長）：私自身は必ずしも要するに行政が考えているようにうまくまとめようと思っていない。つまり私は自分の経歴が大学を出て夜学の教師を 8 年やって、それこそ青森の集団就職で来た生徒たちを扱って、そこから大学へ出たときに一番先に社会教育に加わったのは三鷹である。ちょうど私が文学の講座で、それからこれは東大を出た＝むろうしゅんじ＝という社会教育の先生が出て、それから歴史の先生と、それから児童文学の先生、4 人で同時に毎週授業展開をする。2 カ月に一遍ずつ全体会をやるという中で市民が作る市民のための市民の大学はどうあるべきか、そこで徹底的に実は鍛えられた経験を持っている。ここに区民代表が入っているのはそういう意味で大変いいことなので、皆さん方が本音でぶつけるようにした方が最終的にはいい市民になっていく。いい市民になっていくということはこの文京区の行政を批判的な目で見られる人間をつくる。そういう意味で今、皆さん方の思いが各分科会の中で生きてくればいい。

ちょうど私たちがそういう講座をやっていたときの慶応の大学院のドクターコースにいた参加者が三鷹の今の清原市長である。そう考えると言葉 1 つにしても、まるごとキャンパスはいい。もう 1 つそこで徹底的に教わったことは、「税金を使ってやるということがどういうことなのかということを考える」ということを徹底的に。私はもともと文学の人間なのであまりそんなことを考えたことは

なかった。しかしこれはやっぱり生涯学習の中で考えていかなきゃならない1つの大きな視点だろうし、それから今のまるとキャンパスということも、各分科会で意見を出して、座長の先生の下で新しい文京区のテーマができればいい。